

## 愛は手をかけて育てるもの

たとえあなたの愛が本物であったとしても、実はそれは壊れやすいものです。植物のように、手をかけて育てなければ、枯れてしまいます。

結婚したばかりのふたりは「自分たちの愛は、何もしなくても自然に育っていく」と思い込んでいます。しかし、その愛の関係を長続きさせるためには、手をかけなければいけません。

夫が休日をもったたく取らなかつたり、夫婦が話し合う時間を規則的にとる努力をしなければ、愛は死んでしまいます。包丁だって、研いでいなければ錆びて使い物にならなくなります。

結婚してしばらくの間、私はフルタイムの仕事を持ち、しかも学生で、妻は教師をしながら家のこともこなしていました。この忙しい生活が夫婦関

係にどんなに悪影響を及ぼしているか、ある晩、私は気付きました。確かに妻への愛情はありましたが、あまりにも長い間、夫婦だけの時間がなかったのです。

その夜、私は本を置き、妻と長い散歩に出かけました。そして次の学期では、科目を減らし、ふたりの関係を守るため、卒業を遅らせたのです。あなたにとって夫婦関係はどれだけ大切なものでしょうか。

「妻とは時間が余ったら話せばいい」と思っていますか。それとも、夫婦の間を大切な宝物のように考えていますか。夫婦の愛情と言っても、放っておいたら枯れてしまいます。どんな出世も昇進も、それには変えられません。



## 愛の無風地帯

順風満帆の航海を期待していたふたりが、新婚旅行から帰った途端に、ぴたっと風が止んで、何ヶ月も、ひどい時は何年も、無風状態になってしまうことが珍しくありません。

昔の船乗りは、海賊や、嵐に遭遇するのを恐れましたが、彼らが一番恐れたのは、無風海域でした。無風海域は赤道近くの、風らしい風がほとんど吹かない海域です。そこに入り込んだら、二度と、生きて出られないこともありました。強い風が吹いて、船が元の軌道に戻るまで、何日も、そして何週間も待っているうちに、食料や水が底をついてしまったのです。

結婚生活も、結婚して間もない頃は、熱い関係だったふたりが、無風海域に入り込み、愛がゆっくりと冷めていくことがあるのです。そうならない

ためには、どうしたら良いのでしょうか。

男性にとつては、少々恥ずかしいことかもしれませんが、夫婦関係を守るために結婚前のようにデートや、ロマンティックなことを計画するのです。もちろん、冷めた愛情を一瞬のうちに取り戻す特效薬などありません。

けれど、とにかくだまされたと思つて、一度やつてみて下さい。実行することによつてふたりの間に、新しい風を吹き込み、家庭という船の帆をも一度ふくらめます。斬新なアイデアを出して、実行してみてください。結婚前のように、洒落たレストランで外食するのも良いでしょう。昔のラブレターを読み返すのも良いかもしれません。きっと、結婚した頃の記憶がよみがえつてくると思います。

## 夫婦げんか

喧嘩そのものは、何も心配する程のことはありません。喧嘩の後、どうするかが大切なことです。

ほとんどの人は、たまに夫婦喧嘩をするでしょう。少しばかりの衝突は、むしろ良い結果になることがあります。限度をわきまえた言い争いは、欲求不満のはけ口ですし、気分転換にも役立ちます。

しかし、問題はその後です。信頼関係があれば、争いがすんだ後は、赦し合うことにより、互いの理解が進み、より親しみを感じ、以前より愛し合えるようになります。けれども、信頼関係がないと、夫婦の争いは止むことがありません。一つの言い争いが終わらないうちに、また次のもめごとが起きます。誰もそのような喧嘩をしたいとは思いません。

ですから、ほとぼりが冷めたら、自分の言動や行動をよく振り返ってみてください。相手を悲しませるようなことを言わなかったか。問題から焦点をずらして、相手のプライドを踏みにじるようなことをしなかったか。未解決の部分はまだ残っていないか。しばらく考えてみて下さい。

わずかな努力で、夫婦の衝突を、互いの成長と理解へのワン・ステップに変えることが、誰にでもできるのです。



## 喧嘩はしないに越したことはないが

夫婦の意見がぶつかりあった時、決着がつくまで頑張るべきでしょうか。それとも、さっと引き下がるべきでしょうか。

結婚式を迎えた、あるご夫婦のこんな話を聞いたことがあります。お子さんや親戚、友人が集まってお祝いをした時に、ある人がこう尋ねたそうです。「こんなに長い間、結婚生活がうまく続いている一番の秘訣は何ですか。」

ご主人は、真面目な顔で答えました。「結婚した時に、ふたりに喧嘩はしないと決めたんだよ。何が起こつても話し合う。どちらかが熱くなってきた時には、頭が冷えるまで、どんなに寒くても外を歩き回ったもんさ。お陰で、この二五年間、喧嘩をしないでやってこれたよ。その代わりと言っては何だが、私は肺炎を四七回患ったがね…」

この話は、どこまで本当か分かりません。それに、「喧嘩はしない」という方針が正しいのかどうかも疑問です。喧嘩をすべき時もあるでしょう。大切なのは、上手に喧嘩することです。腹が立ったら、相手を傷つけるようなことばを何でも言つて良いと思うのは間違いです。

二人の意見が真つ向から衝突したなら、その問題そのものに焦点を絞ることが必要です。それこそ、夫婦が長続きする秘訣です。寒い中を風邪をひくまで歩き回るより、よつばどまします。

## お金の使い方

お金の使い方をめぐる衝突は、家庭でよくある問題の一つです。見境もなくクレジット・カードを利用したり、支払う能力もないのに、次から次へと新しいモノを欲しがり、ローンで買う夫婦は、破局への道を選んでいるようなものです。

お金に対する価値観が違う夫婦は、クレジット・カードの使用や、お金の使い方でもよくめめ事を起こします。

私の父親の例を紹介しましょう。父は野山を歩き回るのが好きで、そのためなら多少の出費は何とも思わない人でした。その一方、母がそれと同じような金額で、台所用品でも購入すると、それは無駄使いだと考える人でした。自分が自然を愛していたように、母が家の中のことを大切にしていたことを、

父は理解しませんでした。ふたりは、価値観が違っていた訳です。

私の父の件はさておき、夫婦の同意があってもなくても、そもそもクレジットカード・カードは、危険をはらんでいます。ある人は、「特に結婚してからしばらくの間は、クレジット・カードに『危険！取り扱い注意！』と書くべきだ」と言います。また「借金のないことが、最大の財産だ」とも言います。お金が摩擦の原因になっているなら、買い物をもとまず中断して、話し合うべきです。夫婦がお金の使い方に対する考えを話し合い、同意できたら、多くの問題は解決します。そして、予算が底をついたら、財布をポケットから出さないことです。

## 危機に瀕した友人に私たちができること

最近、離婚は、決して珍しいことではなくなりましたが、友人夫婦が別れたという話を聞くと、やはりショックを受けます。「何か自分にもできることはなかっただろうか」と自問させられます。

余りにもショックが大きいと、私たちは当事者の視線を避けることになりがちですし、何を言ったら良いのか分からないので、声もかけず、独身に戻った友だちは、ひたすら孤独に耐えることになります。

または、通りいっぺんのことばしか、かけられず、「こんなはずじゃ、なかったのにねえ」とか、「一人の方が、気楽よ。」などと言う人もいます。統計によれば、夫婦が破局に至るまでには、ごく親しい人に、その苦しみを訴えているケースが多いようです。そして、私たちのひとことで友人は離婚を思

い留まることもあります。男同士で昼食を食べながら、他の人には言えない話を聞いてあげることができません。自分の友人になら、悩みを聞いてもらいたい、という女性もいます。夫婦でゆつくり話し合えるようにと、子どもの世話を買って出ることができませんでしよう。

危ういところにいる夫婦を助けるために、私たちができることは結構あります。一番良いことは、友人が出しているSOSのサインに早く気づき、優しく話を聞いてあげることです。

## 離婚が子どもに与える影響

離婚についての苦い教訓を、私達の社会はようやく学び始めたように見えます。「ニューズ・ウィーク」誌が、離婚の長期的な影響について、注目のべき特集を組んだことがあります。

一九七〇年代に押し寄せた、離婚という名の大波をかぶった子どもたちは、今もその後遺症に苦しんでいます。彼らは、「大人は誰も、両親さえも信じられない」という悲しい教訓を学びました。大人になって、人を信じることが恐いんです。両親が憎み合うのを目撃しているので、幸せな夫婦関係など望めないと感じます。そして、事実その通りです。

十六歳以下の時に両親の離婚や、別居を経験した女性たちに対して行われた一九八七年の調査がここにあります。やがて成長し、結婚した彼女たちが

離婚や別居をする確率は、他の女性たちよりも五九%も多かったのです。この結論を引き出すために、数多くの人たちが長年の間、計り知れない苦しみを味わわねばならなかったとは、なんと悲しいことでしょう。

確かに、結婚していることが苦痛でしようがない、という人たちがいることは知っています。けれども、安易に「別れればいい」と考える前に、後になって一番苦しむのは自分の子どもたちなのだとすることは覚えておいて下さい。



## 離婚の重荷

離婚は、どれ位の被害をもたらすでしょうか。訴訟費用や、養育費などのことではありません。もちろんそうした金額の大きさもさることながら、大人や子どもたちが受ける心の傷についての話です。

今の高い離婚率は、国の将来に重大な影響を及ぼしつつある事を警告しています。

これは、最近の米国での調査ですが、学校の成績不振や、肉体的、精神的問題、そして非行問題の原因は、かなりの割り合いで家庭生活が関係しているという結果が出ました。

例を上げると、離婚家庭の子どもが留年する確率は、そうでない生徒の倍近くに及びます。片親の家庭で育った子どもの問題行動は、両親が揃った家

庭の子どもの3倍です。逆に、両親が揃った家庭で育った子どもは、停学や退学になる確率が少ないのです。現在、米国全体の子ども4割が、血の繋がりのない大人と住んでおり、その数は増加の一途です。

日本では、ここまで進んではないとは思いますが、夫婦がいとも簡単に離婚を口にする今の傾向は、取り返しつかない事態を招きつつあることは、火を見るよりも明らかです。夫婦間の摩擦は避けられませんが、子どもの将来を考えたら、簡単に離婚を考えるのではなく、何か他の道を探ることができるのではないのでしょうか。

## もし仮に…

「もし仮に…」というゲームを、あなたはしたことがあるでしょうか。ルールは簡単です。

「もし仮に、うちの妻が、あの家の奥さんだったら、毎晩ごちそうを作ってくれて、家の中はピカピカで、行きたいときにはいつでも、釣りにつきあってくれるの」とか、

「うちの主人がもし仮に、あの家のご主人だったら、いつも花束をプレゼントしてくれるし、旅行には連れて行ってくれるし、犬みたいに、ご飯をがつがつかき込むこともしないの……」という具合です。

これが、単なるゲームならともかく、このように考えることは、あまり感心できません。それは、幻想に基づいているからです。身近に付き合ってい

る伴侶のあからさまな欠点を、あなたが勝手に理想化している他人のよそ行きの姿と並べて見ているのです。

ことばを換えれば、あなたが理想化している人も、あなたの目には見えませんが、欠点があるのです。それに、比較することは、あなたの結婚相手に失礼なことであり、二人の絆を決して、強くすることはありません。つまり、この「ゲーム」に巻き込まれたら最後、勝つ人は誰もいないのです。夫婦は、お互いを高め合うべきです。それこそ、結婚生活が長続きするためのコツなのです。